



2012.7.1

7月 ちとせだより

神戸 YMCA ちとせ幼稚園

「2歳までのテレビ・ビデオ視聴は控える」「授乳中、食事中的テレビ・ビデオの視聴はやめる」「すべてのメディアへ接する総時間は1日2時間までが目安」「子ども部屋にはテレビ・ビデオ・パソコンを置かない」といった「子どもとメディアについて」の提言を(社)日本小児科医会が発表したのは、2004年4月のことでした。これは、言葉の発達が遅れていたり、表情が乏しい幼児を多く診察したりするなかで、乳幼児期からのメディアとの接し方にその原因があると考えたからでした。しかし、この我々を取り巻くメディア環境はさらに大きく変化しています。街中でまた電車の中で、多くの人がスマートフォンの画面から目を離さない姿もごく普通のこととなり、この様な状況は益々加速していくことでしょう。そのような人々は、自分自身は現実の世界の中にいながら、自分の意識は電子空間、仮想空間、サイバースペースといった世界にあり、まるで自分を取り巻く社会との関わりを拒否しているかのようです。

現代はこのように生まれた時から、テレビやビデオといった加工された映像を目にし、耳にする音も人間が直接語りかける言葉や自然の音ではなく、機械の中から流れてくる言葉や音に囲まれて、子どもは多くの時間を過ごすようになっていきます。そして、これらのメディア情報はこちらの気持ちや状況を気にすることなく、一方的に流されてくるものですから、受け取る側もその相手と直面するという意識はなく、聞き流したり無視したりすることもごく普通のこととなります。そして、その様な感覚が実際の人間と相対する場面においても、ごく普通になっている人がいるようにも思います。

人間は生まれた時は小さな動物そのもので、親から世話をしてもらい、愛情の表現としての言葉をかけられて安心し、だからこその心も身体も成長していきます。このように子どもは、言葉や感情の表現も、親との直接的な五感を通してのやり取りから習得し、また獲得していくのですが、若い母親は、スマートフォンをベビーカーの中の赤ん坊に向けて映像や音楽を視聴させ、また騒ぎ出す幼児に持たせてゲームをさせて静かにさせておく様々な「子守アプリ」を便利なメディアとしてとらえています。子どもにとってのそのようなメディア環境に対しても何の違和感も疑問も持っていないかのようです。人との関わりが苦手で、自分のことにしか関心もなく、他の人のことなどは簡単に無視してしまう人間を育てているのは、現代のこのような子どもを取り巻く環境にも原因があるのではないのでしょうか。

人間も自然の一員で、子どもも動物としての「食べる、遊ぶ、寝る」といった行為が成長の基本にあります。そして、生まれてしばらくの間はそのすべてを母親にゆだねることとなりますし、幼児期には他の子どものする遊びに興味を持ち、自分も真似てやってみたいという気持ちが原動力となって、様々なことを遊びを通して学ぶこととなります。人間はやはり同じ動物である他の人と、直接的な実体験を通してこそ人として成長することを忘れないでいたいと思います。

年主題 「あふれる愛 小さなものとともに」

7月主題 「やってみる」

聖句 “主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。”
(詩編23 2～3節)